



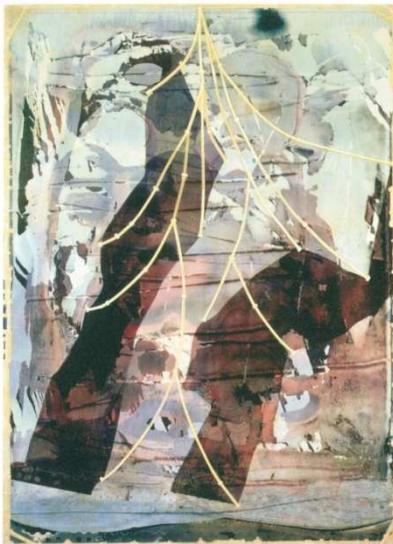
フラッシュ

Flash 1979/1988

会期 2018年10月6日[土]–2019年1月14日[月・祝]

会場 ハラ ミュージアム アーク 現代美術ギャラリー

原美術館が開館した1979年と、ハラ ミュージアムアークが開館した1988年
その両年に焦点をあて、それぞれの年に制作された作品をご紹介します。



【図版1】大竹伸朗「網膜 #2 (紫影)」(1988-90年) ©Shinro Ohtake

ハラ ミュージアム アークは創設30周年を迎えました—
1979年、全国的な美術館設立ブームに先駆けて、原美術館（東京都品川区）は創設されました。その別館としてハラ ミュージアム アーク（群馬県渋川市）が開館したのは1988年、元号が昭和から平成へと変わる前年、いまから30年前のことでした。本展では、このふたつの年にスポットを当て、両年に生み出された作品の数々を、原美術館コレクションより展覧いたします。

出品作家：アンゼルム キーファー／イケムラレイコ／オノサトシノブ／大竹伸朗
操上和美／クリスト／トム ウェッセルマン／野田裕示／フラビオ シロー
真木智子／宮島達男／黎 志文／李 禹煥／ルイズ ニーヴェルスン など

長期展示作家：草間彌生／東芋

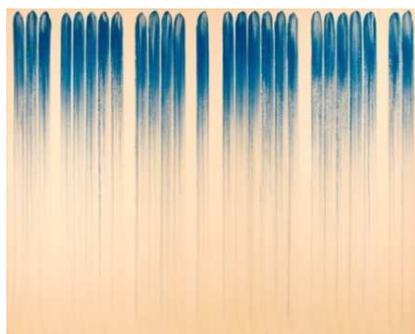
出品作品数：25名、37点。常設作品、長期展示作品を除く。

1979年、原美術館の歴史とともに歩んできた作品たち

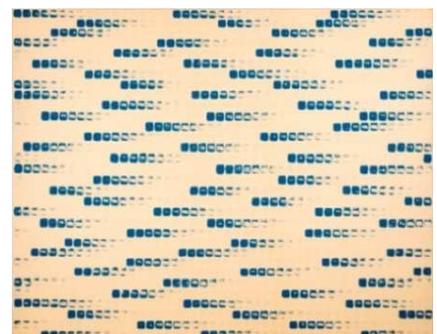
原美術館は、当時、日本では稀有な私立の現代美術専門館として、1979年、東京都品川区の閑静な住宅街に開館しました。1938年建造の、モダニズム建築のスタイルを取り入れた個人邸宅（設計：渡辺仁）を再生した独特の空間で、同時代の先端のアートに出会う場を目指し、さまざまな企画展、イベント、教育普及プログラムを開催し、国際交流を推進してきました。

開館当時は、第二次オイルショックにより高度成長が終焉を迎え、人々の価値観が「物質的な豊かさ」から「精神的なゆとり」へとシフトしてゆく過渡期にあたります。美術の分野では、コンセプチュアルな作品への志向が強まり、60年代に興隆したミニマルアートや、李 禹煥に代表される「もの派」の芸術活動は、70年代の隆盛を経て、「ポストもの派」や「ニューウェーブ」と称される動向へと展開してゆきました。

また、絵画や彫刻の概念が拡張していったこの時期、環境問題への関心と相まって、屋外での大規模なインスタレーション作品も生まれるようになりました。例えばクリストとパートナーのジャンヌ＝クロードは、海岸線などの自然の地形や、橋などの公共建造物を布で覆う大型のプロジェクトを次々と成功させています。



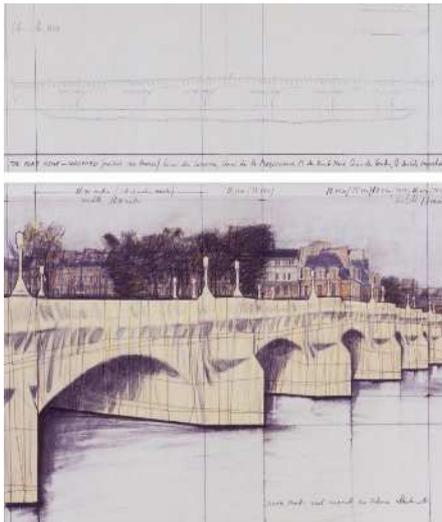
【図版2】李 禹煥「線より」(1979年) ©Lee Ufan



【図版3】李 禹煥「点より」(1979年) ©Lee Ufan



HARA MUSEUM ARC



【図版2】【図版3】李 禹煥 (リ ウーフアン 1936年-)

李 禹煥は、近年、国際的に再検証が進み、高い評価を得ている「もの派」を代表する作家です。今回は、彼の初期の代表作「点より」(1979年)、「線より」(1979年)を展示致します。李の作品は、広い余白を持つ画面上に単純な筆の跡を反復させるなど、素材にほとんど手を加えず提示することにより、作品に対峙する鑑賞者を深い思索へ誘います。この二点は、原美術館創設期に原理事長が作家のスタジオに出向き、作品を前に直接交渉し、コレクションとして迎え入れました。1991年「李 禹煥」展をハラ ミュージアム アークにて開催。

【図版4】クリスト&ジャンヌ=クロード (1935年-)

クリストは 1950 年代よりパリで創作をはじめ、同じころに出会ったジャンヌ=クロードとは、公私共にかげがえのないパートナーとして、以降数々のプロジェクトを実現してきました。初期には瓶や缶などの日用品を梱包する作品を発表する一方、「積まれたドラム缶」などの作品で注目されるようになり、1964年ニューヨークに移住。内と外の狭間という着眼点は揺るがせず、「梱包」の対象を日用品から建築物や自然へとスケール拡大していきました。その後は「包まれた歩道」(1977年アメリカ)、「囲まれた島々」(1983年アメリカ)等の大型プロジェクトを成功させ、1985年にはパリ最古の橋であるポン・ヌフを完全梱包。構想から約9年の歳月・交渉を経て実現しました。1982年に原美術館で「クリストー包まれた遊歩道 資料展」、1990年にハラ ミュージアム アークにて「クリスト 囲まれた島々」展を開催。

【図版4】クリスト&ジャンヌ=クロード
「パリの橋、ポン=ヌフのプロジェクト」(1979年)
©Christ

1988年、ハラ ミュージアム アーク開館の年に制作された作品群

ハラ ミュージアム アークは、時代の変遷とともに多様化してゆく表現形態に対応し、大型の企画展の開催や原美術館コレクションを展示するための場として、1988年、群馬県渋川市に誕生しました(設計:磯崎新)。2008年には特別展示室 観海庵を増築し、古美術と現代美術の取り合わせといった、新たな美の可能性を追求しています。

30年前の日本はバブル絶頂期、翌1989年には昭和から平成へ元号が変わるなど、大きな変革の渦中にありました。また同時期のベルリンの壁の崩壊は、世界に大きな衝撃を与えています。このような不安定な社会情勢と、その反面にある好景気の後押しもあり、美術の分野では、それまで主流だった禁欲的で観念的なコンセプチュアルアートに反動する形で新表現主義が台頭してゆきました。例えばドイツ出身のアンゼルム キーファーは、古代神話、宗教、ナチスドイツといった自国の歴史に主題を求める作品を多く発表し、その代表と目されています。

また、ルイーゼ ニーヴェルスンは、はじめは絵画を学びましたが、次第に木製の廃材を寄せ集めた立体を黒や金などの一色で全体を塗装したレリーフ状の作品へとスタイルを変化させてゆきます。色彩や感情豊かな具象絵画の再生同様、表現の多様化の傾向は世界各国で同時発生的に起こり、国境や文化の違いを越えて影響しあい広まってゆきました。



【図版5】アンゼルム キーファー「メランコリア」
(1988年) ©Anselm Kiefer

【図版5】アンゼルム キーファー (1945年-)

キーファーは神話、宗教、思想、錬金術、そして母国ドイツの歴史を題材とした象徴的な作品を制作し発表し、新表現主義の代表的な作家と目されています。今回展示する「メランコリア」はドイツの画家 アルブレヒト デューラーの同名の作品からインスピレーションを得たものです。彼が手掛ける作品は、絵画、写真、立体、パフォーマンスなど、表現方法はさまざまですが、いずれも断片的な言葉、鉛、糞、砂、毛髪などをモチーフに使用するなど、一貫して重厚で喚起力に富んだ印象であるのが特徴です。

【図版6】ルイーゼ ニーヴェルスン (1899年 -1988年)

ニーヴェルスンは 1920 年代より絵画を学んでいましたが、50年代後半には木製の廃材を寄せ集めたレリーフ状の立体の制作を手掛けるようになり、注目されます。作品はそれぞれ木材の持つやわらかな質感や表情を覆い隠すように、黒や金、銀などの一色で全体を塗装され、精悍な印象を与えます。



【図版6】ルイーゼ ニーヴェルスン「鏡 - 影 XXXXIX」
(1988年) ©Louise Nevelson



HARA MUSEUM ARC

【図版1】大竹伸朗「網膜 #2 (紫影)」(1988-90年)について ※画像は1枚目をご参照ください。

大竹伸朗(1955年-)は80年代より、さまざまに集めた素材を用いた作品制作で知られていますが、この「網膜」のシリーズでは、そうした彼の「外側にあるもの」ではなく、閉じた瞼の「内側に浮かびあがる映像」の集積を試みた、今では初期を代表する重要な作品として知られています。大きな印画紙を無為に感光させた色鮮やかな支持体に、フィルムやドローイング、布テープなどを重ねて、最後に上からプラスチックでコーティングしているため、偶然差し込む光の反射さえも作品自体へと内包してゆくような作品といえます。

また、今回ご紹介するアンゼラム キーファー作「メランコリア」も、同様に、絵画と写真、造形の境界を横断する意図をもって制作されています。今回の展示を機に、同年に、異なる場所で制作された2点を比べて鑑賞するのもおすすめです。

(「網膜 #2 (紫影)」の素材：写真、布テープ、プラスチック、木製パネル/サイズ 250.8 x 180.8 x 7.3 cm)



【図版7】ジャン=ミシェル オトニエル「Kokoro」
2009年 撮影：白久雄一

■ハラ ミュージアム アーク (群馬) について

1988年、原美術館の別館として群馬県渋川市に開館しました。上毛三山のひとつに数えられる榛名山麓に位置する美術館の、黒で統一されたシャープな外観は、豊かな緑に美しく映えています(設計：磯崎新)。近年はコレクション作品を中心とした企画展示、イベント、ワークショップの他、さまざまな教育普及プログラムを行っています。2008年には静謐な和の空間に仕上げた特別展示室「観海庵」と、専門家や愛好家に調査研究の機会を提供する「開架式収蔵庫」を新設。時代や地域の枠を越えた、多彩な美の表現を紹介しています。

■特別展示室 観海庵(かんかいあん)とは

1988年の開館以来、世界の現代美術を紹介してきたハラ ミュージアム アークは、2008年、創立20周年を記念して、特別展示室「観海庵」を増設、従来の現代美術館としての活動に加え、当館ならではの視点で古美術を紹介しています。「観海庵」を手がけたのは、ハラ ミュージアム アークを設計した建築家 磯崎新。書院造を参照して設計された空間での展示を通し、伝統と現代の交差する新しい体験の場を提案しています。



【図版8】特別展示室 観海庵内観



【図版9】開架式収蔵庫内観

■開架式収蔵庫

現代美術コレクションの一部は「開架式収蔵庫」と呼ばれるユニークな空間に保管しています。展覧会会期中の毎週日曜日には、当館スタッフによる展示解説とこの開架式収蔵庫の特別公開をいたします。また、学芸員や教育研究機関に所属する方など専門家に対しては、特別観覧の機会も提供しております。

特別プログラム

毎週日曜日 2:30 pmより約1時間、中学生以上対象、要事前予約
(TEL:0279-24-6585)



HARA MUSEUM ARC

【開催概要】

展覧会名 Flash (フラッシュ) 1979/1988
 会 期 2018年10月6日[土]—2019年1月14日[月・祝]
 会 場 ハラミュージアム アーク 現代美術ギャラリー
 〒377-0027 群馬県渋川市金井 2855-1
 Tel. 0279-24-6585、 E-mail. arc@haramuseum.or.jp

開館時間 9:30 am - 4:30 pm(入館は 4:00 pm まで)
 休 館 日 木曜日 (1月3日は開館)、12月4日 - 7日、12月11日 - 14日、1月1日
 入 館 料 一般 1,100 円、大高生 700 円、小中生 500 円

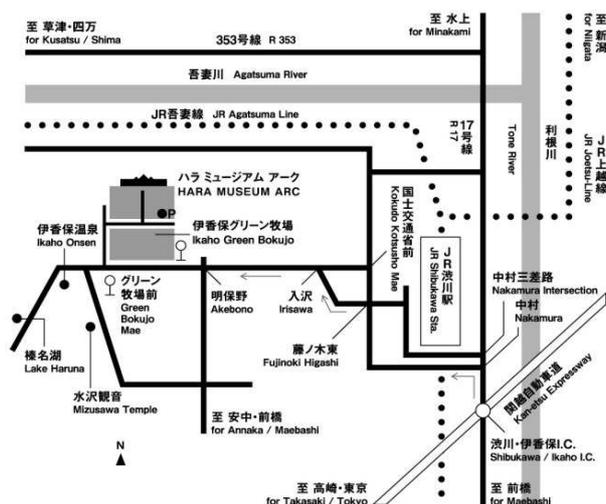
※「いのち・いのり」展(特別展示室 観海庵)も併せてご覧いただけます。

■原美術館メンバーシップ会員無料、70歳以上半額、20名様以上団体割引。学校団体は特別料金規定あり。

■伊香保グリーン牧場とのセット券：一般 1,800 円、大高生 1,500 円、中学生 1,400 円、小学生 800 円

■群馬県内の小中学生は学期中の土曜の入館無料。ぐーちょきパスポートのご提示により5名様まで入館料各200円割引。群馬県民の日(10月28日)は県内在住の大学生以下の方は無料、先着20名様にオリジナルポストカードセットをプレゼントします。

交通案内 JR上越線「渋川駅」より(上越・北陸新幹線利用の場合は「高崎駅」で上越線に乗り換え)伊香保温泉行きバスにて約15分、「グリーン牧場前」下車、徒歩7分。「渋川駅」よりタクシーで約10分。
 車の場合、関越自動車道「渋川・伊香保I.C.」より8km、約15分。無料駐車場あり。



【WEB】 <http://www.haramuseum.or.jp>
 【mobile】 <http://mobile.haramuseum.or.jp>
 【twitter】 <http://twitter.com/HaraMuseumARC>
 【BLOG】 <http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum/>

取材・図版提供などのお問い合わせ先：ハラ ミュージアム アーク 広報 山川、柳田 (担当学芸員 青野)
 Tel 0279-24-6585 Fax 0279-24-0449 E-mail press@haramuseum.or.jp